



年間第 24 主日 (マタイ 18:21-35)

億千万回兄弟を赦すことができるか

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」(18・21) 当時のユダヤ社会では、三回赦してあげればそれは最上級の寛大さを示すことでした。七回は、それを上回る数でしたが、イエスはそれでもご自身の教えに到達できていないと答えます。

先日、長崎カトリックセンターで司祭集会が開かれ、前教区会計の不手際について集会を開き、今後の方針を話し合いました。集会は紛糾しまして、ほとんど何の結論も得られなかったのですが、私にとって収穫もありました。

それは、私が長崎教区で心の清い司祭の代表だと思っているある先輩が、こんなことを言っておられたのです。「私は教区内の司祭の不祥事に心が痛み、ミサで祭壇に立つのが恥ずかしい。できることなら逃げ出したい。それでも、自分の十字架を背負って、祭壇に立っています。

神の教会を、この世のもので健全な状態に立て直そうと考えるから、こんな悲惨なことになったのではないですか？長く教区会計を果たしてくださった先輩は、この世のもので神の教会を健全な状態にしようなどとは決して思わなかった。そこが根本的な間違いでしょう。」

この言葉を聞いて、「なんの实りもない、ただのガス抜き集会だったか」と失意のうちに帰るところでしたが、長崎教区もまだともしびは消えていない、捨てたもんじゃないと思ったのでした。教区報で掲載された不名誉な記事の内容は、残念ながら事実です。すべての教区司祭が、これから責任を負うことになります。

福音朗読に戻りましょう。たとえ話の王の前に引き出された家来は、「億千万」の借金を抱えていました。返せるはずがありません。それなのに王は、この家来を赦しました。この家来に赦される事情があったからではなく、王が一方的に赦しを与えてくれたのです。「億千万」の借金は、一般的には返済不可能な金額です。

ここで家来が学ばなければいけなかったのは何でしょうか。私は、王に対する信頼回復に努めることだったと思います。王に対してと言うより、王が導いている「国民」に対して、どうやったら信頼を取り戻せるか。この一点に絞って考えるべきだったと思うのです。

ところで、この「億千万」の借金を王に背負させた家来は、外に出て自分に百デナリオンの借金のある友人に出会うと、「捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った」というのです。社会的な制裁を受けた人たちがしばしば、「懲役何年、執行猶予何年」という判決を受けたりしますが、この「億千万」の借金をした家来も、いわば執行猶予の状態だったはずですが、それなのに、友人の借金の返済を強要したことで、かえって自分で自分の首を絞めてしまったのです。

この家来が取るべきだった行動は、この執行猶予中に、どうやって

王の信頼を回復するか、どうやって国民への信頼を取り戻すかでした。友人と会った時、どうやって信頼を取り戻すかだけを考えていたら、あんなまねはしなかったでしょう。

今回、長崎教区の前教区会計も、これから信頼回復の日々を歩まなければなりません。長崎教区は関係者を切って捨てませんでした。切って捨てたなら、その他の司祭はそれ以上責任を問われなかったでしょう。けれども切って捨てなかった。それはつまり、すべての教区司祭が、教区長と教区民すべてに、信頼回復のための努力をせよという神からの呼びかけだったのだと思います。

田平教会の周囲を一周しますと、400mあります。この前歩いて、歩数を数えたら、600歩で一周しました。これから必ずとは言いませんが、周囲を十周歩きますと6000歩です。一年365日、毎日は無理なのでその三分の二、240日歩くと144万歩です。まあ、あと何年居るかは分かりませんが、億千万歩に到達するにはざっと174年が必要です。信頼回復の道を一步ずつ、174年かけて取り戻すつもりでいます。

ついこの前も、有名人が逮捕されまして、それまでの活躍と社会貢献が何だったのかと問われました。転落するのはあつという間ですが、信頼を回復するためには私のたとえで言えば174年必要です。しかも、他のことには目もくれず、自分に借りのある人もいるかも知れませんが、それらを横に置いて、たった一つ教区民の信頼を取り戻すことだけに注力して174年必要です。一步ずつ前に進みたいと思います。

「何でそこまで泥被らないといけないのか？」という意見は今でもくすぶっています。けれども教区民の信頼を回復する歩みは、関係者だけの働きでは不可能です。教区司祭全てが、誠実に努力することが、今週の福音から学ぶ教訓です。

「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」(18・35) 億千万歩歩き通せないかも知れませんが、私が倒れて眠りにつくまでには、私の兄弟である司祭を赦せるようになれたらと願っています。